

---

# 雪だるま

零・Z A・音

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

雪だるま

### 【Nコード】

N4459A

### 【作者名】

零・ZA・音

### 【あらすじ】

ゆつくりと降り積もる雪は世界を白く染め上げていた。いつぱい降った雪の中から僕は生まれたんだ……。

空から、ひらり、ひらり、と舞い落ちる。

ゆつくりと、でも確実に、ふわり、ふわり、と世界を白く染め上げていく。

そして、僕は生まれた……。

朝 真つ白な世界に、一つの足跡。

僕を作ってくれた女の子の小さな足跡が庭中にいっぱい。

ころころと雪玉を転がす女の子が、手を合わせて息を吹きかけて、また雪玉を転がしていく。

冷たいのに、寒いのに、それでも止めようとしなない。

「さきちゃん、頑張るもんね。寒くなんかないもんねえ」

大きな雪玉と小さな雪玉。

その二つを重ねて僕は作られた。

僕は雪だるま。女の子が一生懸命作ってくれた雪だるま。目や鼻、口……顔を作って、手には手袋をつけてくれた。

「わあいつ、できたあ」

僕が出来たとき、女の子は嬉しそうに笑ってくれた。

女の子の名前は「さきちゃん」

さきちゃんは、嬉しそうに笑みを浮かべ、家の中へと走って行った。

どこに行ったのだろうか？ なんだか寂しいな。

そう思っていたら、しばらくしてさきちゃんが大きな女の人と手を繋いで歩いて来た。

あれは誰だろうか？ でも、さきちゃんはなんだか嬉しいそうに、

「ママ！ 見て見てえ」

僕を指さしていた。

「すごいねえ、さきちゃん」

「うんっ」

嬉しそつに返事をしているさきちゃんに、『ママ』と呼ばれた人も優しい笑顔を向ける。

……僕もなんだか嬉しい。

ママはさきちゃんの頭を優しく撫でながら、

「もう、学校に行く時間になっちゃったから、続きは帰ってからね  
背中を押して家の中へと歩いて行こうとする。

どこ行くの？ さきちゃん……。

ちよつと悲しそうな顔をしたさきちゃんが、何度も僕の方を向いて歩いて行く。

さきちゃん、そんな顔をしてないで。なんだか分からないけど、僕はここにいるから。

でも、僕も歩けたら……僕も動けたら。さきちゃんと一緒に『学校』ってところに行けるのに。

ゆっくりと時間は流れて。

なんだか温かくなってきた。空は太陽が顔を出して、その光で僕を照らしている。

……どうしよう。

このままだと、僕は溶けて消えてしまう。

僕の身体が段々と溶けていって、足元に水が流れ出している。

早く帰ってきて……さきちゃん。僕、段々と眠くなってきたよ。

### 夢

僕は歩いていた。不思議な感覚だけど、これは僕なのかな？

人間の姿をしている僕。目に入ってくるのは、人間の手や足。

どうして、こんな格好で歩いているんだろう？ ……夢？ それ

とも、僕のお願いを神様が聞いてくれたのかな？ でも、今なら、この姿なら、会いにいける。さきちゃんに会いにいける。

「さきちゃん……」

「……だあれ？」

突然、声を掛けられて、驚いた顔をしているさきちゃんが、僕を見ている。

僕は、ちゃんと人間の姿をしているのかな。

「僕は……ゆき」

「……ゆき、ちゃん？」

小首を傾げて不思議そうに僕を見つめるさきちゃんには、誰だか分からないみたい。

僕は君が作った雪だるまなんだよ。

「さきちゃん。はい……コレ」

「……手袋？」

手に持っていた手袋を、さきちゃんの前に出した。

「さきちゃん……落し物だよ」

「あ……私の手袋だあ」

朝、一生懸命僕を作ってくれたとき、手袋を僕の手につけてくれたから。だから、きつと冷たいだろうと思って……。

「ありがとう。……かたっぽだけ？」

僕の手から手袋を取り、キョトンとしてるさきちゃん。

「ごめんね……もう一つは、持つてくるときに落としちゃったんだ」

「そうなんだ……でも、暖かいよ」

そう言っつて、僕の手を握ってくれたさきちゃんの手は暖かかった。

片方は冷たい手……片方は温かい手。

でも、どちらも僕を作ってくれた優しい温もりを持った手。僕の

大好きな手……。

「……ありがとう」

「なあに？」

「何でもないよ。それじゃ……僕」

そのまま、歩いて行くこととした僕の手を握ったままのさきちゃんの手が、さっきよりも強く握っていた。

「ゆきちゃん、帰っちゃうの？」

「あ、えつと……」

「一緒に遊ぼう」

にっこり、と微笑んでいるさきちゃんが僕の手を引いて行くこととする。だけど、

「あ、あの……お家帰らなくていいの？」

「少しだけだから、いいの。それにゆきちゃんとなんだか遊びたいの」

そう言った僕の手を更に強く握って、近くの公園まで駆けていった。

それから僕達は一緒に遊んだ。

公園の中で、『ブランコ』『シーソー』って言うので遊んだけど、とても面白かった。

さきちゃんとたくさん遊べて嬉しい。でも……。

「僕……そろそろ、帰らなきゃ」

「ええ、もう帰るの？」

頬を膨らませているさきちゃんは、まだ遊び足りない様子だった。でも、僕はもう“ここ”にいる事が出来ないんだよ。

「……うん。もう、時間みたいだから」

「そうなんだ。じゃあ、また遊ぼうね」

膨らませていた頬を戻して、笑顔のさきちゃんは嬉しそうに僕にそう言ってくれた。

「……うん。また。遊ぼうね」

「うんっ、遊ぼうね」

さっきと同じように、笑顔のさきちゃん。

「ただ、ごめんね。僕には「また」が無いんだ……。」

「さきちゃん……。」

「なあに。あれ？」

最後に言った僕の声は、さきちゃんには聞こえなかったみたい。

だって……僕は消えてしまったから。

それでも伝えたい。

ありがとう……さきちゃん。

家に帰って来たさきちゃんは泣いてた。

ママに「帰りが遅い」って怒られていたけど、それは僕のせいなんだよ。さきちゃんは悪くないんだから怒らないで。

そんな声ばかり聞こえる家の中から出て来たさきちゃんが、僕の姿を見てまた泣き始めた。

「雪だるまさんがあ……。」

ぼろぼろ、と大粒の涙を流していくさきちゃんを、ただ見ているだけしか出来ない事が悔しかった。

泣かないで……。

何度、心の中で呟いてもその声は届かない。

家の中から出てきたママが、泣きじゃくるさきちゃんを優しく撫でてあげる。

「雪だるまさんは、お家に帰ったのよ。」

「お家に……？」

「うん……また、さきちゃんがいい子にしていたら、遊びに来てくれるわよ。」

さきちゃんの頭を撫でながら、僕が「いた」場所を見て微笑むママ。

もう少しだけ、時間があるのかな。最後のときまで僕は、さきちゃんのそばを離れたくないよ。

僕を作ってくれたさきちゃん……僕と一緒に遊んでくれたさきち

やん。

「また」はないかも知れないけど、約束は出来ないけど

また……遊びにくるね、さきちゃん。

ゆっくり、と意識が薄れていく僕の目に、

「ばいばい……雪だるまさん。また、遊ぼうね」

空に向かって手を振るさきちゃんの手には、僕にくれた手袋が片方だけ握られていた……。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4459a/>

---

雪だるま

2008年11月7日08時05分発行